



金の稲穂を涼風が撫でていく季節、ハロウインの準備で賑わう街々は、どこも活気に満ちていた。

ハロウインが終われば、クリスマスが待ち構えている。

本格的に忙しくなる前に済ませようといわれたのは、年内では最後の大規模の招集だったが、人数が増えれば増える程、意見も議題も迷走し、混沌を招く。

白熱する各国の言い分に、決まらないものは決まらないが、それぞれ的情勢事情が透けて見えるだけでも、有益な集まりだった。

大人数での会議は疲労も多く、終わった途端、夕食とは名ばかりの酒盛りに入っていく。

今回の開催国のドイツにはご飯も酒も美味しく、大半がパブへ移動したが、時間と共に、徐々にメンツも欠けていく。

食事もそこに帰宅する者や、程よく食事とお酒を楽しむ者、酔っ払いから逃げる者達など、理由も様々だった。

イギリスやアメリカ達と食事をしていた日本が、プロイセンに捕まったのも、まだまだ序盤だった。

豪快にビールをありながら話に混ざるプロイセンを、適当にあしらっている内に、フランスとスペインが雪崩れ込んでくる。

酔っ払いが増えていく中、アメリカとカナダが早々と離脱していく中、完全に逃げ遅れた日本は苦笑するばかりだった。

それでも、まだ陽気なお酒が続いている内は、まだマシな方で、お店に迷惑をかけることもない。

泥酔する前に移動する話が持ち上がり、そのままの勢いでドイ

ツの家にやってきた。

イギリスと日本は、完全に巻き込まれ事故に近かったが、文句を言ったところで、この悪友3組に効くはずもない。

ほろ酔い気分で始まった二次会は、夜が更けるごとに酒の分量も加算されていく。

今日は誰が一番最初に服を脱ぎ始めるのだろうか、密かに日本が期待していた頃、唐突に奇妙な音が鳴り響いた。

小さな爆発音に全員が疑問符を抱えながら、周囲に視線を向ければ、先程までいた2人が忽然と姿を消している。

隣にいたはずのスペインを探したプロイセンは、テーブルの下で固まっている小動物を目にした途端、絶句した。

しかし、酒のせいで鈍った思考では、小難しい事は素通りし、大爆笑に変わるだけだった。

「ケーセツセツセツセツ！お前、なんだ、その姿っ！ちよつと触らせる！」

彼特有の笑い声と共に掬い上げられたスペインは、自らの手に視線を落としたまま呆然と固まっていた。

茶色の大きな耳と尻尾が付いたスペインは、小型犬サイズしかなく、抵抗するよりも先にわしゃわしゃと撫でられた。

もつふもふの毛並みに思わず、飼犬とジャレ合っている気分になるプロイセンを他所に、足元で縮こまっているイギリスを発見したのはフランスだった。

「お前もふわっふわだね〜」

よっこいしよと、掛け声付きで持ち上げたフランスは、真っ白で毛並みのいい大きなたれ耳と、小さくて丸い尻尾が、ピコピコと動くのが可愛く映る。